信用と負債　D・グレーバー

本書は訳者が示唆しているように、焦点は負債論であり、同時に貨幣論でもありました。

コミュニズム、交換、ヒエラルキーなども、本書において中枢的な役割を担っています。

負債が人類にとってどのような存在なのか？

著者が紐解いた貨幣と暴力の 5000 年。

何故人々の一部は、貨幣に嫌悪感を抱いているのか？

その貨幣とはどんな存在で、どのような経緯で発展してきたのか？

現在にも繋がる、負債と貨幣のあり方を提言してくれています。

以下本書にて

原初的負債

・貨幣とは交換を促進させるために選ばれた一つの商品で、自分以外の商品の価値を測定するために使用される。

・貨幣は尺度にすぎない、何を測定するのか？それは負債である。

・硬貨に金や銀が使用されていても、それらが金銀地金の価値で流通することはない。つまるところ 1 枚の金貨それ自体で役に立つことはない。人が受け入れている

のは、他の人もそうするだろうと想定しているから。

・通貨単位の価値とは、ある対象物の価値の尺度ではなく、人が別の人間に寄せる信頼の尺度。

・負債は貨幣や市場に先立って存在しており、貨幣と市場自体はそれをバラバラに切り刻む手段。

・人間の存在自体が一つの負債。

古代の軍隊の周囲において

・王は兵士に硬貨を渡し、商人は兵士に欲しいものを供給する。市場は副産物であり、平民は一部を王に税として返金。

・市場の創出は兵士を養うのに便利であり、あらゆる面で有益である。

・これを植民地世界に当てはめると、貨幣を刷り住民にそのカネの一部の返金を要求する。征服者が立ち去った後も、継続する消費需要の基盤を整え、本国に植民地を永遠につないでおく。

経済的関係が基盤をおくことのできる『三つの主要なモラル』

コミュニズム

・コミュニズムは、今現在のうちに存在している何かであり、あらゆる人間社会に

存在するもの。

・コミュニズムこそが、あらゆる人間の社交性の基盤。

・『各人はその能力に応じて、各人はその必要に応じて』の原理が適応されてしかるべき社交性の原材料。

・すなわち社会的平和の究極的実体である。私たちの根本的相互依存の承認であると考えることができる。

交換

・交換とは等価性にまつわる全てである。

・双方が与えた分だけ受け取る、やり取りのプロセス。

・物質的な財の交換の場合は、そこには競争の要素があり、どちらも収支決算、損得計算を行っている。

・常に関係全体が解消され、双方がいつでも関係に終止符を打つことができる。

・商業的交換の特徴は『非人格性』

・経済理論において、あらゆる人間の相互作用は究極的には商取引であり、『人は最小の努力で、最大の利益を手に入れようとする利己的個人であると想定される』

ヒエラルキー

・真の慈善は受取人に負債を負わせようなどとはしない。

・一方的な寛大な振る舞いは、その後も期待できるものとして扱われる。

・ある行為が反復されると習慣となり、その結果行偽者の本質的性格を決定する。

戦争

・戦争とは、暴力の全般化した世界であり、人間経済は非人間化と破壊の支配する巨大な装置と転化した。

・奴隷となることは、全身内や知り合い、共同体から引き離され、全尊厳を失うこと。

名誉と不名誉

・社会的通貨は、人間の間の関係を測定、査定、維持するために使用されるもの。

・名誉の概念はある種の遺物、あるいは象形文字ともみなすことができる。

・暴力によって生きる男は、ほとんど不可避に名誉に取り憑かれる。

・『暴力の行使が正当化されるのは、名誉を傷つけられる時である』

・名誉の定義は他者からどう見られているかに存在するということ。

メソポタミア（家父長制の起源）

・紀元前 3000～2500 年、シュメール語の最初期の文章には、数多くの女性統治者たちの名前の記録があり。

・女性たちが『医師、商人、公務員』といった地位を占めていたが、数千年の間に女性の地位が崩壊していった。

・戦争と国家と市場は、歴史的に見ると全て互いに育み合う傾向にある。

・征服は徴税につながり、徴税は市場を創設する手段となる。更に市場は兵士と行政官にとって好都合である。

古代ギリシア

・有力な男たちは名誉を追求しながら人生を送り、名誉は追随者（followers）と財宝という形態をとっていた。

・貨幣は欲望の民主化を持ち込んだと言えるかもしれない。

・貨幣を欲する限り、皆同じふしだらな物体を追い求める。

古代ローマ（所有と自由）

・ドイツの法学者　ルドルフ・フォン・イェーリングは、ローマ帝国は三度世界を征服したと述べた。一度は軍隊、２度目は宗教、３度目は法律である。

・絶対的な私の権利とは、他の誰かがそれを使用することを妨げる私の権利のみで

ある。

・私的所有とは所有者がその所有者でもって、欲することはなんでもできる絶対的権能。

・元来人間はあらゆる事物が共同で所有されている状態で生きていたが、戦争が最初に世界を分断した。征服、奴隷、協定、国境といった、問題を規制する人類の共通規定が戦争から生まれた。

・自由とは端的に権能のこと。

メソポタミア前 3500～前 800

・神殿と宮殿の複合体にて貨幣は計算の尺度として利用されていた。

・神殿や宮殿はなぜ、単純に上がった利益の配分を要求しないのか？それは、遠方から戻った商人は正直に言わない。それならばと固定された利子率で返済額が前もって固定された。

枢軸時代　前 800～後 600 年

・同時代に生きた人物に、ピタゴラス、ブッダ、孔子がおり、大いなる問いに振り向いた時代となった。

・歴史上初めて、人間が理性的な探求の原理を大いなる問いに振り向けた時代。

・枢軸時代は世界の主要な哲学的潮流全てのみならず、仏教、ヒンドゥー教、儒教、キリスト教などの誕生を目の当たりにした時代。

国家の独占

・民間人が鋳貨を発明し、国家がすぐにそれを独占する。

・大量の金銀銅が脱宝物化する

・神殿、富裕層から取り出され、一般人の手に渡り、日常の取引で使用され始める。ほとんどは盗まれたものであり、この時代は戦争が一般化した世界で、戦争の性質上貴重品は掠奪される。

近西：イスラーム

中世世界経済の中枢

・世界経済の中枢神経と金融革新の源泉は西洋にあった。

・古い枢軸帝国に似たイスラーム諸帝国の運営。職業的軍隊を創設し、侵略戦争を起こし、奴隷を捕獲する。戦利品を鋳つぶし、兵士や公務員に硬貨として配給する。その硬貨を税で返すように求める。

・行政官と商人の同盟で常に支配していた。

・自分たち以外の住民を負債懲役人の状態か、いつ転落するかもしれない状態にと

どめておいた。

極西：キリスト教世界

・貨幣は社会的慣習制度であること、基本的に人間がそう決めたものが貨幣である。

・徴利に関する最も有名な古代の説教、『徴利とは、暴力的な強盗の一形態。あるいは殺人の一形態とすら、みなさねばならない』

・利子をとることで、人は剣によらずに戦っているのだとするなら、利子をとることは、殺すことも罪にはならないような者たちに対してのみ正当である

・利子＝怠惰の罪、商人の利益は自らの労働への支払いとしてのみ、正当化されうる。貸手が何もせずに、獲得する利子は論外とされた。

イスラーム教の近世の商人資本主義

・ペルシアや、アラブの思想家たちは、市場は相互扶助の拡張と考えた。対してヨーロッパは、『商業は徴利の延長ではないか？』負債とは取引上の双方を巻き込む罪業。

大資本主義帝国の時代　1450～1971 年

・大航海時代とともに始まる新時代。

・近代科学、資本主義、人文主義、国民国家などの擡頭。

・1400 年代はヨーロッパ史における特異な時代で、大都市はペストの襲来により打撃を受け、商業経済は衰え、都市全体が破産、騎士階級は残りの富をめぐり争う。

結局資本主義とはなんなのか？

・社会主義者の理解による資本主義。

・資本主義という語を発明したのは社会主義者で、彼らの理解によると、『資本主義とは資本を所有する者たちが、所有しない者たちの労働を支配するシステム』とある。

1700 年頃

・近代資本主義の黎明期にあらわれる信用と負債の巨大な金融装置。

・金融装置は、実践的効果として労働力を汲み出し、有形財を際限なく拡大していった。

・オランダとイギリスにおける最初の株式市場は、軍事と貿易双方の投機的事業であった。

・東インド会社、西インド会社の株式取引を基盤としている。

『負債懲役』制度

・被雇用者は雇用者の店で、必需品購入を強制され負債を背負う。

・法規上、負債を払うまで職を離れられない。そして負債懲役労働者は、事実上の奴隷である。

・しかし事実として生産性、衛生、教育の進歩、科学的認識などの日常的必要への応用があり、産業革命以降、数十億人の人々の生を仕事場の外で向上させたことは確かである。

おそらく世界こそが、あなたから生を借りている

・銀行とは怠惰な金持ちから資金を集める方法であり、怠惰な金持ちは想像力が乏しい。

・新しい富を生産するエネルギーと意欲を持った勤勉な貧者に委ねる。

・債権者と債務者の階級的構成は、中世は債権者は富者、債務者は貧者。だが現在は逆で、公債、無担保債券、抵当銀行、貯蓄銀行、生命保険各種、社会保障の給付金などでありふれている。よりつつましい所得の大衆の方が、むしろ債権者。

著者の問いとして

・今や真の問いは、どうやって事態の進行に歯止めをかけ、人々がより働かず、よ

りよく生きる社会に向かうか。